

白い影

小川未明

青空文庫

夏なつの日のことでありました。汽車きしやの運転手うんでんしゅは、広い野原のほらの中にさしかかりますと、白しろい着物きものを着た男おとこが、のそりのそりと線路せんろの中なかを歩いてゐるのを認めみとめました。

このあたりには人家じんかもまれであつて、右みぎを見ても左ひだりを見ても、草くさの葉はがきらきらと、さながらぬれてでもいるように、日の光ひかりに照てらされて光ひかつていました。また、遠近おちこちにこんもりとした林はやしや森もりなどが、緑色みどりいろのまりを転ころがしたようにおちついていて、せみの声こゑが聞きこえていました。

白しろい男おとこを見ると、運転手うんでんしゅは、ハツと思おもつて、あわただしく警笛けいてきを鳴ならしました。なぜなら、汽車きしやがちようど全速力ぜんそくりよくを出だして走はしつていたからであります。

しかし、白しろい男おとこは平気へいきで、やはり線路せんろの内側うちがわを歩いていました。もうすこし早く、これを見みつけたら、こんなに運転手うんでんしゅは、あわてることもなかったのでしょうけれど、このあたりはめつたに人ひとの通とおるところでなし、安心あんしんをして、彼は前方かへぜんぽうに見える遠い国とほこつきよ境うの山影やまかげなどをながめて、その山の頂やまいたきに飛とんでいる雲くものあたりに空想くうそうを走はしらせていたのであります。

白しろい影かげは、もう、二十間けん……十間けん……すぐ目の前めまえに迫せまりました。運転手うんでんしゅは大急おおいそぎで

進行しんこうをしている汽車きしゃを止めました。その反動はんどうで、どうしたはずみにか、列車れつしやは大脱線だっせんをしてしまいました。おりよく、それが貨車かしやであつたからたいした負傷者ふしようしやはなかつたけれど、貨車かしやは幾台いくだいとなく壊れて、田たの中に埋うまつたり、堤防ていぼうの上に転覆てんぷくしたりして、たいへんな騒ぎさわぎになりました。

運転手うんでんしゅは、負傷ふしようをしました。そして、うめきながら、白い着物きものを着た大男おおおとこをひき殺ころしたと告つげました。

それで、みんなは、汽車きしゃの転覆てんぷくの原因げんいんが、人ひとをひき殺ころそうとしたため、急いそいで汽車きしゃを止めたのにあつたことを知しりました。それにしても、こんな大事件だいじけんをひき起おこした男おとこは、どうなつたかといつて、みんなは、汽罐車きかんしやの下したをのぞいてみました。そこには白しろい着物きものを着た男おとこがひき碎くだかれて血ちみどろになつてゐるだらうと思おもひましたのに、なんの姿すがたもありませんでした。

「白しろい男おとこなんて、いないじゃないか？」

「どこにも人間にんげんはおろか、ねこ一匹いっぴきだつてひかれてはいはしないじゃないか。」
みんなは、こう口々くちぐちにいいました。そして、これはまさしく運轉手うんでんしゅが、むだ目めを見たのだといいました。

あくる日の町の新聞には、運転手がむだ目を見たために、貨物列車を脱線さしてしまったことを大きく書いていました。そして、運転手は、このごろ、神経衰弱にかかつていたということもつけくわえて報道しました。

すると、ここに、白い着物を着た大男が、その後も真昼ごろ、のそりのそりと線路上を歩いているのを見たというものがありました。なんでも、その人の話によると、雲をつくばかりの大男であつたというのでした。

こうした奇怪な話は、これまで、二度めであります。この鉄道線路は、西南から走つて、この野原の中でひとうねりして、それからまっすぐに北方へと無限に連なっているのです。

この前この地方に、稀有な暴風が襲つたことがあります。そのときは、電信柱をかたつぱしから吹き倒してしまいました。高い木は折れ、家は倒れ、橋は流れてしまったので、じつに、天地は真つ暗になったのであります。人々は、そのときの恐ろしかったことをいまでも記憶しています。やはり、その当座、一つのうわさがたちました。

なんでも、暴風は、黒い太い棒になつてうずを巻いて過ぎていった。あの暴風がくる前、灰色の着物を着た、見上げるばかりの大男が、この鉄道線路上をのそり

のそりと歩いていたのを、見たものがあつたというのであります。

それで、このたびも運転手が、白い着物を着た大男が、線路内を歩いているのを見たといったことが、かならずしも、むだ目ばかりでないといつて、みんなに不安を抱かせたのです。

線路は修繕されて、やがて列車は、いままでのように往復するようになりました。その後になつて、ふたたび同じような事件が繰り返されました。

もとより、これは、別な運転手で、もつと年をとつた熟練な男でありました。その汽車には、大臣とたくさんな高等官が乗っていました。この野原にさしかかると、汽車はしきりに警笛を鳴らしつづけましたが、不意に、停車場でもないのに止まつてしまつたのです。

「どうしたのだ？」といつて、みんなは、客車の窓から頭を出して、外をのぞきました。運転手や、その他、汽車の勤務員は、車内から飛び降りて、前方の汽罐車の方に向かつて駆けていきました。

「ひいたな？」と、客車に乗っている人々は、頭を出して、その方を見ながらいいました。

また、一等室とうじつからも、大臣だいじんや、高等官こうとうかんの顔かおがちよつとばかり現あらわれました。しかしその人たちの顔かおは、じきに引ひつ込こんでしまいました。けれど、内部ないぶでは、やはり他の客きやく車くるまに乗のっている人たちと同じようなことをいつて、うわさをしていたにちがいありません。

「不思議だ！」という声こえが、あちらにも、こちらにも起こりはじめました。

「いったい、どうしたことかな？」と、大臣だいじんは眉まゆのあたりをしかめて、おそばのものとたずねました。おそばのものは、さつそく、汽車きしゃの監督かんとくを呼よんで、子細しさいをさらにたずねたのであります。

監督かんとくは恐きよう縮しゆくして、いまあつた事実じじつを答こたえました。

「線路内せんろないを歩いていくものがありますから、笛ふえを鳴ならしたのです。」

「その笛ふえの音おとは私も聞きいた。」と、シルクハットをかぶつた高等官こうとうかんはうなずきました。

「歩あるいている人間にんげんは、耳みみが聞きこえないとみえて、いつこう平気へいきで、汽車きしゃが後あとからくるのを氣きづかなかつたのです。しかたがないものですから汽車きしゃを止めました。しかし、そのときは、もう遅おそかつたか、歩あるいている人間にんげんのそばまで汽車きしゃが走はしつていきました。」

「ひいてしまつたのか？　しかし、前後ぜんごの事情じじようを聞きけばしかたがないことだ。」と、高こ

「等官はいいました。」

「いえ、ところが、線路の上にも血が流れていず、またあたりにも、その人間の影が見えないのです。」

「どんなようすをしていたのか？」

「やはり、白い着物を着ていたといいます。」

「こう答えて、監督は、高等官の顔を仰ぎました。」

「最近、汽車が脱線したときも、それだったじゃないか。また、運転手がむだ目を見たのではないか。」と、高等官はいいました。

「今度は、二人も、三人も、白い着物を着た男を見たものがあるのです。」と、監督は頭をかしながら答えました。

おそばの者は、このことを大臣に申しあげました。すると、大臣は、大きな体をゆすつて、

「このたびは、脱線をしなくて、命拾いをしたというものじゃ。」と、驚いたような、喜んだような顔つきをしていいました。

大臣の乗っていた列車が、途中不時の停車をしたというので、また問題にな

りました。そして、あくる日の町から出る新聞には、運転手が、どうしてこのごろ、こうむだ目を見るのか？ 気候の変化で、もしくは、過度の労働でみんな神経衰弱にかかっているのではないかという疑いを起こしていました。

その後は、汽車が進行してくる際に、たとえ線路内に、子供や老人の影を見ましても、運転手は警笛を鳴らさずに進行をつづけることがありました。

「これも、きつとむだ目であろう。」と、彼らは思ったからであります。

たちまち、責任問題が起りました。犠死者の数が著しく増したからです。なぜ、警笛を鳴らさなかったか？ 被害者の側では、こういって、鉄道側を非難いたしました。

白い影は、鉄道線路を伝つて、ついに街の方へやってきました。こんどは、街のあちらこちらで、白い影のうわさが盛んになりました。

「今日、向かいのご隠居が、取引所で、白い男がみんなの中に混じって見物していたといわれました。それで、昼過ぎからの株がたいへんに下がって、大騒ぎだったそうですよ。」と、あるところでは、おかみさんが近所の人に話をしていました。

「白い男ってなんでございますか？」

「白い着物を着た、気味の悪い男だそうですね。」と、おかみさんは答えました。

そこへ、ちょうど隠居が通りかかりました。二人の女は、おじいさん呼び止めました。

「おじいさん、あんたは、白い男をごろんなさったのですか。」と、一人の女はたずねました。

「めつそうな、私が見たら、いまごろは破産せんけりやならん。白い、気味の悪い目つきをした男が見物人の中に混じって、じつとしていたということだな。なんでもその男を見たものは、みんな株に損をしたという話じゃ。」と、おじいさんはいいました。

ある日、街の四つ角のところで、電車と自動車とが衝突しました。自動車はもはや使用されないまでに壊され、電車もまた脱線して、しばらくは、そのあたりは雑踏をきわめたのであります。そして、怪我人もできましたので、電車と自動車の運転手は、警察へいつてしらべられることになりました。

「どうして、衝突をしたのだ？」といつて、警官がききますと、自動車の運転手は、そのときのことを思い浮かべるような目つきをして、

「晩方でありました。両側には、燈火のついたところあいです。電車の停留

場には、たくさん人が立っていました。私は注意をして、それらの人たちを避けながら走っていますと、目の先へ、小さな白い着物を着たおじいさんが、ちよこちよこ出てきたから、私はとつさのことですし、たいそう狼狽しました。その前まで、そんな老人が歩いていることに気づかなかったのです。私はひくまいと思って、全速力で脇の方へそれますと、そのとたんにやってきた電車と衝突したのでした。」と申しました。

「その着物を着た老人はどうしたか？」と、警官はききました。

「不思議にも、その間に老人の姿は消えたように、どこへ行ってしまったものか見えなくなりました。」と、運転手は答えました。

「おまえの見た、白い着物を着た老人というのは、大男ではなく小さかったのか？」

警官は、これまで、大きな白い男が、影のように線路の上に立って、幾たびか汽車を脱線さしたり、また止めたりしたというわさを聞いていましたから、いま小さな白い男だと聞いて、異様に感じたからであります。

「私たちの見たのは、白い小さなおじいさんでした。」と、両方の運転手は、はっきりと答えました。

「いつ、そんなに小さくなったのか？」と、警官は、くびをかしげました。

「そのことは、私たちに、わかりません。」と、運転手は、おそろおそろ答えました。

この白い影が、この町に入ってきたことは、どんなにみんなの生活の上に不安を与えたでありましょう。ほんとうに、ペストや、コレラが入ってきたよりもおそろしい、防禦のできない事実であつたからであります。

しかし、白い影が、ある人の目に見えて、ある人の目に見えないという理由はない。それを見る人は、氣候の關係で、また神経衰弱にかかったからではなからうかというような解剖をした人がありましたが、実際において、気づく人と気づかない人との相違があるということに、ほぼ輿論はきまつたのであります。

そして、いちばん困つたことには、なにか自分の不注意で、失敗をしたものが、白い影を見たからといって、ほんとうは、見もしないのに、すべての過失を白い影に歸してしまつたことであります。

「白い影をつかまえることにしよう。」

町の人々は、こう話をきめたのであります。そして、その正体を見とどけようと思ひました。

まだ暑い、夏の時分、野原を白い男がさまよっているときは、大きな雲つくばかりの体
 でのそりのそりと、真昼の線路を歩いたものであるが、街に入ってから、小男となつ
 て、晩方から夜にかけて、多く人混みの中に出かけるようになりました。それで、捕ら
 えることは困難であつたのです。しかし、だんだん白地の浴衣を着る人が少なくなつて、
 みんな人々が黒っぽい着物を着るようになってから、一方では、やっと白い影を捜すの
 に都合がよくなりました。

幾日かたちましたけれど、まだ、白い男を捕らえたものはありませんでした。なんでも、このごろは、白い男は、月のいい寒い晩に、町の屋根から、屋根を伝わつて、星のよ
 うに飛んでいるのを見たというものが、あちらこちらにありました。

「地震があるのではなからうか？」と、一時は、こんなうわささえたものがあつた。ま
 た夜はなるべく外に出ずに、白い影を見ないものと、早くから戸を閉めてしまうような臆
 病者も少なくはなかつたのであります。

すると、こんどは、いままでとはまったく違つたうわさがひろまりはじめました。
 「今年は、いままでにないことだ。暴風もこず、米はよくできて豊年だ。昔の人の話
 に、白い影が入ってきた年は豊年だということだ。」というようなうわさがたちはじめ

ると、

「大河にかかっている鉄橋の根もとが腐れていたのをこのごろ発見した。白い影が線路の上を歩いていたのは、それを注意するためだった。」と、というような説が、後から後からつづいて起こったのであります。

町の新聞は、また白い影を科学的に批評をしていました。ある理学士は、白い男のように見えたのは、水蒸気のどうかした具合で、人間の形に見えたのであろう。秋から冬にかけては、毎夜のごとく、月のいい晩には、白いもやがいろいろの形で立ち上るものだ。また、夏の日、野原で見た、白い大男というのも、おそらく同一の現象で、雲のようなものではなからうかといって、なんでもなく、それを解決してしました。最初、白い男を見て、汽車を脱線さしたばかりでなく、自分も負傷した運転手は、神経衰弱から、むだ目が見えたのだと判断されたものの、とにかく汽車を脱線させた責任から退職させられて、いまでは、町に近い港の汽船問屋に勤めていたのであります。

もう秋も末のことでありました。今夜にも、冬がやってきそうに、空の色は澄んで海の色はさえていました。野原の中の林も色づいて、こずえからは、黄色い葉がひとりでこ

ぼれるように、ほろほろと落ちていました。また、街の並木の葉は、たいてい落ちつくし
てしまつて、黒い小枝の先が青い空の下に細かく、網の目のように透いて見えていました。
この港から、南洋の方へゆく船は、今夜出てゆくのが今年じゅうの最終でありま
したが、あまりそれには乗つてゆく客もなかったのです。

夕陽は、岡を染め街に沈みかかっています。そのとき、汽船の待合室に、いつかの運
転手は、一人の不思議な女をみとめました。

目の美しい、髪の毛のちぢれた娘が、燃えるような赤マントを着て、たった一人ベンチに腰
をかけて、悲しそうな目つきで、海の上をながめていたのです。そして、娘は、手の中に、
小さい真つ白なねを抱いていました。人が近つくと、その白いねは消えたように、マ
ントの下に隠れてしまいました。そして、だれもそばにいとなくなると、また、真つ白なね
こは、娘の手の中に入つて遊んでいたのです。

「この町を騒がした白い悪魔は、こいつでなかったか？」と、いつか負傷した運転手
は、ふと心に思いました。そして、今日、船に乗つて沖へ出ていつてしまつたら、もうこ
の町に不安はなくなるだろうと思ひました……。はたして、それから、もう白い影を見
たものはありませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「白《しろ》い影《かげ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白い影

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>